

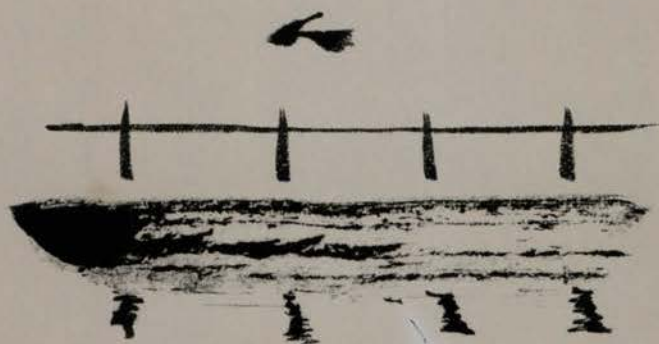
浄

monthly
JÔDO

土

January 2003

1



法然上人鑽仰会

大本山増上寺蔵・残欠二巻本〈重文〉

法然上人絵伝が 絵葉書になった!!

1セット 8枚組

美装封筒入り

定価:800円

(本体+税)

送料別



菩提寺修学の図・牛車
母子の別れと旅立ちの図
菩提寺修学の図・講義
叡山入室の図
後白河法皇に御談義の図
道俗教化の図(立教開宗)
善導和尚来現を拝写せしむる図
阿弥陀三尊影現の図

お申込みは下記まで

発行=法然上人讃仰会

東京都港区芝公園4-7-4

明照会館内 〒105-0011

電話/03-3578-6947

FAX/03-3578-7036

振替/00180-8-82187

上の絵葉書は実物と多少異なります。

寺院紀行

寺に歴史あり。
人々に信仰あり。
日本の
心の故郷を紀行する。

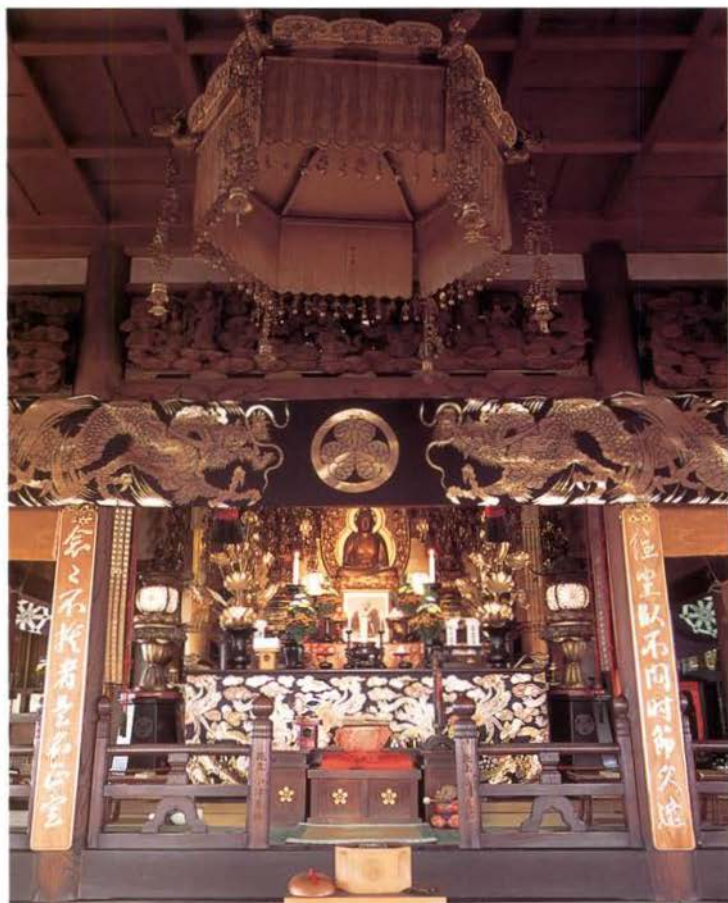
松阪

樹敬寺

樹敬寺第四十六世山下法文住職と樹敬寺本堂。境内は江戸時代の交通の要衝に位置し、今もかつてと同じ場所でも変わっていない。



本尊阿彌陀仏は第二世、中興昇尊上人が安置し、三十七世行尊上人の時に再建されている。



樹敬寺の檀家である本居家。国学者として有名な本居宣長はこの樹敬寺で授戒、五重相伝を受けている。

本居家から預かっている宣長のお位牌。



樹敬寺の墓地にある参り墓とは別に、宣長の遺言で建てられたおくつき。樹敬寺から車で約二十分の山室山の山頂にある。



本尊と背中合わせに立派な仏が安置されている。客殿から本堂に入るときは、まずこの釈迦如来に手を合わせる。



樹敬寺が創建された松ヶ島。今は田んぼの中に城跡の小山が残っているだけになっている。



樹敬寺山門。松阪に移転した樹敬寺は、伊勢参りの参道に面して建てられた。



明治二十六年の松坂大火から復興させたのは第四十二世暢誓法音上人。名僧だった法音上人を囲む会が生前から作られ、今なお続いている。写真は弟子に囲まれる法音上人（左写真前列中央。）

明治の復興に檀家として大いに協力した原田二郎氏の歌碑。法音上人と同時代の人で、福祉活動のための（財）積善会を作り、今も活動は続いている。



撮影／タカオカ邦彦



松阪といえば伊勢商人で有名。写真は旧小津清左衛門の松坂商人の館。

浄土

2003/1月号 目次

巻頭カラー 寺院紀行 松阪 樹敬寺	撮影=タカオカ邦彦	1
子どもと共に生きて	山内昭道	6
お正月法話	羽田恵三	14
寺院紀行 松阪 樹敬寺	真山 剛	20
響流十方	小村正孝	28
食と健康	長田英樹	32
民話をたずねて	石崎敬子<絵 石川忠夫>	34
Jフォーラム		47
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	48
漫画で楽しい仏教用語	藤井ひろし	51
編集後記		52

表紙題字=浄土門主 中村康隆猥下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎



子どもと 共に 生きて

山内

昭道

東京家政大学名誉教授
亀戸幼稚園園長

朝の挨拶から一日ははじまる

私の今の仕事は毎朝幼稚園の門前に立って登園してくる子と親に「おはようございます」と挨拶することです。幼稚園の園長として当然のことでしょうが、大学に勤務するようになってから、この朝の挨拶をほとんどしないままに過ごしていました。講義のある時だけ大学へ行けばよいと簡単に考えて専任になったものの、大学での勤務時間の強化、大学運営の仕事をする役職につかざるを得なくなつて、幼稚園にいる時間がなくなり、不在園長とならざるを得なかったのです。友人の園長に「不在園長論」なるエッセイを雑誌に書かれたこともありました。又、母親たちから幼稚園にいて下さいとつめ寄られたこともありました。この間、幼稚園は家内にまかせ切りでした。

さて、定年となり大学生活が終わると共に、私は毎朝門前で子と親を迎えることができるようになり、永年の罪亡しの気持で門前に立ち、子どもと親と顔を合わせ、朝の挨拶をすると、子どもと親から生きる喜びを与えられるのです。園バスがないので、登園は歩いたり、自転車に乗つて来ます。園児だけでなく弟妹をつれて来る母が多いのです。なかには自転車の前に一人、後に一人、母の背中に一人と三人の子どもをつれて登園する母親も少なくないのです。なぜか二人、三人の子持ちが多く、一人でも妊娠している母が目につきます。幼稚園の門前で見る限り少子化を感じないのが不思議です。

子どもたちの朝の挨拶はいろいろです。私の前に立ち止まつて「えんちようせんせいおはようございます」といねいにする子。

歩きながら、顔だけを向けてする子。

母親にうながされて、やっと小さな声で挨拶する子。

「おはよう」と大きな声で叫びながら走り込んで行く子。

挨拶はその子なりの表現ですが、子どもの心が私に伝わって来ます。そして、毎日挨拶を繰り返しているうちに変化が起きます。ロシア人の母の子どもは母に背中をもたれかけてやっと小さな声で「おはようます」としか言えなかったのに、一年立つと、自分からピヨコンと頭を下げた挨拶ができるようになり、この頃は必ず母が子どもといっしょに私の前に来て、笑顔で挨拶してくれるので私も思わず笑顔になります。

門前で友だちを見つけるとお互いに走り寄って抱きあわんばかりに近づき、お互いに、「うちゃんのママ」と母にも声をかけ、手をつないで園内に入っていきます。特に年長児の男の子たちは挨拶もそこそこに園内に走り込んでいきます。このような姿を見ると、友だちと遊び、生活する園生活が嬉しくて嬉しくて仕方ないという気持ちを、からだから発散させているようです。

幼稚園の満三才からの三年間は正に友だちと遊び、生活することを心から欲求する時期でこの心情を満たすのが幼稚園だとあらためて実感するのです。

この毎朝の挨拶は園生活の始まりであり、この朝の挨拶があつてこそ、子どもも親もさわやかな園生活を始めることができるのではないかと今考えるのです。そして毎朝の繰り返しでなければならぬと、今、しみじみと反省しているのです。

環境問題は「いただきます」の心から

かつて、Y市の幼児教育審議会の会長をしていた時のことです。この会には教育と福祉

の行政関係者、保育園、幼稚園の園長、小、中学校の校長、学職経験者がメンバーでした。昼食の時は、小学校長に聞きました。Y市には仏教、キリスト教、神社の保育園、幼稚園があり、ここから進学した子どもたちが、もしも給食の時に手を合わせ「いただきます」と唱えたらどうしますか、と聞いたのです。校長は「それは望ましくない」と言いました。そこで大学にいる元全国小学校長会の会長をしたことのある同僚に聞きました。「見逃す」といい、さすが会長的答えと感心しました。つまり小学校では給食であつて、食事ではないのです。食事には作法がともないますが、給食では食べればよいのでしょうか。

ところが、かつて国立の上越教育大へ赴任した女性教授が「驚いたのよ。学生食堂で学生が手を合わせていただきますというのよ」と話してくれました。たまたま新潟で公立幼稚園の先生方に講演した時、昼食の時に手を合わせて「いただきます」をするのですかと聞いたのです。当然のように「はい、しています」といいました。新潟県の小学校もみんな手を合わせて「いただきます」をしていました。このことに大変関心をもち、富山、石川、福井出身の学生に聞いたところ、小学校の給食の時、手を合わせて「いただきます」と言っていることがわかりました。しかし、長野県はしていませんでした。とにかく、新潟、富山、石川、福井県では仏教が生活の中に根づいているにちがいないと思いました。後に新聞の記事で富山県の教育委員会に「手を合わせていただきますというのは止めよ」と抗議されたことを知りましたが、その後のことはわかりません。

教育基本法では特定の宗教を公立学校で教えることは禁じられていますが「宗教に関する寛容の態度及び宗教の社会生活における地位は教育上これを尊重しなければならない」となっており、給食の時、合掌していただきますというのは宗教の社会生活における地位

であり尊重されるべきことで、決して、してはいけないことではない筈です。

さて、この「いただきます」の真意です。よく、食事の食材となった米、野菜、魚肉などつくってくれた人々、そして調理してくれた人たちに感謝していただくのだと解釈する場合があります。これも「いただきます」の心の一つです。しかし、仏教では「植物や動物のおいのちをいただきます」が真意ではないでしょうか。悉有仏性であり、草木にも人間と同じいのちがあり、まして動物にもいのちがあります。こうした植物や動物のおいのちをいただくかなければ生きることのできない悲しい存在だと心深く感じるのが日本民族です。これは仏教以前からのわれわれが生活しているあらゆる場所、あらゆるものに神々がやどっているという民族信仰と関係深いことだと考えます。それが仏教によって理論づけられたのではないのでしょうか。

これに対して、キリスト教にカーニバル、謝肉祭があります。私は食物にされた動物たちへの感謝の祭りと思いましたが、食物となる動物たちを創造した神への感謝、食物となる動物を神の恵として感謝するということのようにです。西欧の農民たちは自ら飼育したブタを家の庭で殺し、ベーコン、ハム、ソーセージにすることに少しも哀れみも悲しみも感じません。神の恵みとして神へ感謝しても、殺される動物には哀れみはないのです。

しかし、日本人には殺される動物たちを供養する習慣があります。上野不忍池の弁天島には鳥塚、魚塚、ふぐ供養碑、スッポン感謝塔などが、これらを商う人たちによつて建てられ、お彼岸、お盆には供養されています。又、日本人は鯨を食べるのはよくないとして批判されるのは、人間が食べるために神が創造したのではないからという理由です。しかし、かつてアメリカは油をとるために捕鯨し、日本近海までやって来て、捕鯨船に水や食

料など補給するために開港をせまりました。日本では、油だけしぼり取るのではなく、肉、皮膚、ヒゲなどすべて利用つくし、更に一頭一頭に戒名をつけ過去帳をつくり、墓をつくり供養していました。アメリカでは石油が発見されランプ油として鯨油が必要なくなつて捕鯨は削減しました。

又、米沢の博物館の庭に草木塔、草木供養塔がありました。山で木を切った時に建てるもので七十基ほど山に残っているといます。食肉のために殺された動物たちだけではなく草木にまで供養塔を建てる日本民族の心こそ、ほんとうの自然愛護の心です。

もう一つ、害虫ということばがあります。私はかつて農林省の農業試験場害虫研究室に勤務し、水田、畑の作物の害虫を殺す研究をしていました。しかし、幼稚園に戻ってから害虫ということばは使うまいと思いました。園庭のサクラの木にアメリカシロヒトリが大発生してもこの毛虫は害がないので、子どもたちに遊ばせることにしました。子どもた

お寺に便利な少数・小廻り対応印刷

経本・寺報・寺院パンフレット・

各種記念冊子・チラシなど

また、布やアクリル・皮革に印刷して記念品に!!

貴寺院
オリジナル!

編集・写真・レイアウトなどお気軽にご相談くださいませ。

刷りつくし・形づくり

株式会社 ハニージ

〒112-0011 東京都文京区千石4-2-112

ハッピー千石ビル

電話 03(5976)8212

FAX 03(5976)8225

担当 久保田

ちは手のひらに乗せてはわたしたり、なかには毛虫の頭と尻をもつてひっぱったり、いじくりまわして遊びます。結果的に殺してしまうこともありですが、害虫だからと子どもと共に殺すことはしません。害虫とは人間の都合で勝手に名づけたにすぎません。毛虫と素直に遊ぶことは、生きものと直接ふれあうことであり、生きているものを直観的にとらえることです。そして、死んだ毛虫は供養してやることを教えます。死んだものを粗末に扱ってはいけないことを教えたのです。カブトムシが死んだ時、電池が切れたという子どもたちに、生きているものは死を迎える事実を明確に気づかせるためお地藏さまのまわりに埋める供養は大切な儀礼であることを知らせたいのです。自分にも親にも祖父母にもいのちがあり、毛虫にも同じいのちのあることを直観させることを願っているのです。

さまざまな草木、虫、魚、鳥、けものたちが、それぞれにいのちをもつて生きていることを子どもたちの心の中に芽生えさせたいと願っているのです。そして、これらの多様な生きものたちが相互に依存していることを生態系（エコシステム）というが、このことこそ、それぞれが因縁を結んで生きているということではないでしょうか。

環境問題とは人間もこの地球上の自然の一員であることに気づき、自然と共に生きる心がなければ解決しません。西欧の人間中心主義では解決しないことに気づくことでなければならぬのです。



◆表紙のことは◆

無

心象書道

永井建策

平成15年の表紙は、永井建策さんの心象書道で飾っていただきます。

心象書道とは、文字を心の中で自由に遊ばせて、その無限の広がりの中から、絵どころとともに切りとる書。楽しく、夢あふれ、そして私たちにうったえかける、ある心をもった新しい書道です。

連載のきっかけは、氏より差し出された心象書道で書かれた一枚の名刺。敢えて編集部からの紹介で一年の連載の幕開けとさせていただきます。(編集部)

(ながい けんさく)

昭和20年東京生まれ。中央法科卒業後、読売広告社に入社、企画のセクションに配属される。二十数年の勤務を経たのち、自動販売機製造メーカーの販売企画の仕事に。平成11年に独立、会社を設立し、新規事業を展開中。一方、趣味で始めた心象書道が趣味の世界を越え、展覧会を開くまでになっている。

お
正
目
法
話

羽
田
恵
三

建暦二（一一二二）年の大谷の禪房は、心
穏やかならぬお正月でした。

法然上人は七十五歳の時、お弟子の不始末
の累が及び、讃岐の国への流罪の旅に赴かれ
ました。老いの身にはずいぶん厳しい旅であ
ったろうと想像致しますが、自らはこれを
「朝恩」と頂かれ、わずかな供を連れお出か
けになりました。

それは一年の後に許されますが、京洛に入
ることは許されず、摂津の国箕面の勝尾寺、
二階堂に四年の歳月を送られます。

勝尾寺は高い山の上です。朝夕には草庵を
山霧が深くつつんだようであります。

永年住みなれた京都を目の前にして、帰る
ことのできないもどかしさ、せつない思いを
お和歌に残されました。

『柴の戸に 明け暮れかかる白雲を

いつ紫の色に見なさん』

ここまで帰っておりながら京都に入ること
かなわぬならば、朝な夕なに訪れる白雲を、

いつそ阿弥陀如来のお迎えの紫雲と頂きお浄
土にお参りしたいことでございます。第二の
故郷である京都への望郷の念は切なるものが
ありました。

やがてその願いが通じ、建暦元（一一二一）
年十一月十七日、赦免の宣示届くやいなや、
三日後の十一月二十日には上洛の望みを果た
しておられます。

しかし、ご流罪の前に住みなれた吉水庵は、
荒れ果てて、お師匠様をお迎えできるような
状態ではなかったようで、お弟子方のお心の
うちは如何ばかりだったかと想像致します。

九条兼実公の弟であられた青蓮院の慈鎮和
尚様のご親切により、大谷の禪房を借り受け
てようやくお師匠様をお迎え致したのであり
ます。

長旅の所労が募ったのでしょうか。新年が近
づく程に、日々老衰の徴は現れ、明けた正月
二日頃よりは「不食の事」とありますから、
お食事が喉を通さなくなつた様であります。

往生の近きを感じられたのか、お側近くに
あつた、あるお弟子が、

『お師匠様、すでに御本復のご様子が見えま
せんが、この度の往生は間違ひございませ
んでしょうか』

『この度の往生決定か』とお尋ね致したよう
でございます。

元祖様はそのお尋ねに

『我もと極樂にありし見なれば、さだめて帰
りゆくべし』

『私はもともと極樂にあつた身だから、この
世の勤めを果たしたら、もといた国へ歸つて
行くだだけだ。何も心配することはないよ！や
がてやつて来るあなた方をお待ち受け致して
おきましよう』と慈愛あふれるお言葉で諭さ
れたようでございます。

法然上人は、勢至菩薩の垂迹と云われなさ
つたお方でもあり、お念仏の中に何度も仏を
拝まれ、お浄土の相を我が目になさつたお方
でありますから、お浄土を信じ、お浄土へ歸

つて行くとなやすく申されたようであります
が、私ども凡夫にはなかなかそうたやすくは
参りません。

『極樂浄土、阿弥陀如来様は、私たち凡夫に
は直接拝ませて頂くことはできません。それ
故に信じがたい事もまた事実であります。

ある方は、

『地獄極樂と説かれているが、それは勧善懲
惡、人間は制約がなければ、どこまで悪い事
をするか分からない。その為に善い事をした
人は極樂へ生まれ、悪い事をしたら地獄へ落
ちるぞと、勧善懲惡で説かれたもの』

等と理屈を申される方がありますが、それは
あくまでも対岸の大事と見ている時の話で、
対岸の火事で済むならば、理屈で片着ける事
もできましようが、それは決して対岸の火事
で終わるものでは有りません。必ず我が身に、
あるいはその周辺に火の粉は迫つてまいりま
す。その時に、そんな理屈で片着けられるの
か？ 決してそれで済まされるものではありません

ません。

私どもはお役目上、様々なお葬儀にお立ち会い致します。そんな中で何が辛いかと申しますと、幼い子供さんを交通事故などで亡くされたようなお葬式に立ち会うことであります。

お葬式が終わっても、お母さんは小さな柩をなかなか離そうとはなさいません。柩にすがって「もう一度笑ってちょうだい。笑顔を見せてちょうだい」と涙にくれておられます。側におられるご親類の方々が気を遣われて、「あなた！ 気持ちに分かる。気持は分かるけど表では皆さんが出棺を待つておられる。もう送らせて頂こう」と仰しやるけれど、お母さんの耳にはなかなか届きません。

これを、傍らから第三者的に見るならば、これほど理屈に合わない話はありませんね。死んでしまったものが声を出すはずがない。笑顔を見せるはずがない。これが理屈であります。

では、柩に取り縋って泣いておられるお母さんは、その理屈が分からずに泣いて縋っておられるのでしょうか？ いやそんな事は決つてありません。理屈は百もご承知ですが、つい先日「行つて来まうす」と言つて出掛けた我が子が、次には物言わぬ姿になつていく。そんなことは母として信じることはできないのですよ。夢なら早く醒めてくれ！ 我が子に限つて・・・祈らずにはおれないのが現実でありましょう。

幼い子供さんを血液のガンで亡くされたお母さんが、ご本山へ納骨に見えた事があります。そのお母さんが、お医者様から「今の医学では助ける事ができませんよ」と言われた時は、とてもその言葉を信じることはできませんでした。我が子に限つて・・・、何とか奇跡がおこらぬものかとひたすら願いました。

また、この薬が良いと言われたら、その薬を求めて走りました。この信心すればと云わ

れたら、あちらの信心、こちらの宗教、ワラをも縋る思いでございました。だから日々の信仰も、あちらこちら、お参りの仕方がコロコロ変わります。それを聞いていた傍らの娘さんが、

「お母ちゃん、私の為にしてくれているのは良くわかる。でも私はお念仏が良い！」

そんな事を娘さんが仰ったというんです。このお母さんは滋賀県のお方でしたが、滋賀県という处はお念仏の信心が篤い处です。大人だけでなく子供達を集めて、修養会を開かれるお寺が沢山あります。おそらくそのお子達も、そんなご縁を頂いておられたのでしょうか。

しかし、その時は、お母さんの耳に届かなかった。そして娘は亡くなって行きました。

「それから先の私の日暮しは、『もぬけの殻』『生ける屍』でございました。他人に会う気にもなれない。仕事に行く気にもなれない。お家の中に引きこもって過ごしておりました。

た。

そんな時、お寺のご住職が訪ねて下さって、『今度五重相伝がお寺で勤まるから、そんな日暮らしをしているのなら、だまされたいと思つていいから入行してみませんか』とお誘いを頂きました。

私は、五重受けたらどうなるかというと、期待するものも何もなかったが、そこまで言われ、断る理由もないものですから、お寺へ足を運びました。受者の皆様は熱心にお念仏礼拝に励まれるが、私は義理でついた五重でしたから一日は何もせず見ているだけで終わりました。二日目、私一人がだまつている訳にもいかず、遅ればせながら念仏礼拝もし勸誡のお話も耳にはいるようになりました。そのお話の中で、突然私の心に灯のともる思いが致しました。

あの日あの時、ほんとうに辛い悲しい別れをしたけれど、『あれが最後の別れではなかった』と教えられた時、本当に暗い心に灯を

ともされる思いが致しました。

この世では辛い悲しい別れであつたけれども、あれが最後の別れではなかった。もう一度あの子に会える世界がある。お念仏申し続けて行くならば、阿弥陀様のお浄土でもう一度あの子に会わせて頂ける。ここが頂けた時、私の心に安堵が戻つて参りました。今日まで手離すことのできなかった、この子のお骨をようやく、おじいちゃんおばあちゃんの納まつていらつしやるご本山に納めさせて頂く思いにさせて頂きました」

とお参り下さったのです。

あつてはならぬことですが、そんな辛い悲しい体験を通して、心の目を開き、知恵や理屈に納まるものではないお浄土を頂かれたお方でございます。

北朝鮮の拉致被害に遇われた横田めぐみさんのお母さんが、テレビの会見で仰つた言葉に大変印象に残つた一言がありました。

「あの子は、あの子なりに勤めを果たしてく

れてるんです。如何なることがあろうとも、最終的にはあの子に会えるんですから」

横田さんは熱心なクリスチャンだとお伺いいたしました。信仰の立場は異なつても、目には見えない、理屈には頂きにくい世界を頂くことによつて心に生きる尊い力が湧いて来ることを教えて下さつたと思います。

この信仰があればこそ、大事な娘さんを奪われ辛い悲しい二十五年を耐え抜いておいでになつたのだとあらためて痛感させられました。

法然上人の心のお師匠、善導大師は、たとえ火の河、水の河激しくわき起ころうとも、お念仏申し仏の国を信じ西へ向かえば「やがて西岸に至り、諸々の難を離れ、善友相見え、享樂止むことなし」と尊いお譬えをお示しでございます。お示しの通り、お念仏申し申し進ませて頂ければ、必ずみ仏を、またお浄土を仰がせて頂く目を開かせて下さると信じ、お念仏に励ませて頂きたいものであります。

寺院紀行

松阪

樹敬寺

撮影／夕力才力邦彦
文／真山 剛



詠唱樹鈴会の皆さんとの本堂での記念写真。
前列中央が山下住職。

五重相伝ごじゅうそうでんという言葉をこ存じだろうか。浄土宗僧侶である読者には愚かな質問だが、浄土宗の教えを五つの順序に従い伝えるもので、第七祖である聖阿闍梨しょうあきりが明徳四（一三九三）年に行つたのを嚆矢とする浄土宗の法を伝える重要な儀式法会だ。

浄土宗の教えである念仏の真髓を伝える、いわば奥義伝授だが、伝える相手は僧侶ばかりでなく、浄土宗を信仰する一般の人々、檀信徒でもある。

僧侶でない信者を在家というが、この在家への五重相伝は、正確には化他けた五重というそうで、この化他五重を受けると在家ながら浄土宗でしかつかわれない戒名、これも正確には法号というのだそうだが、誉号を授かることができるという。つまり戒名をもらえるのである。

この在家への五重相伝がいつ始まったか？ 定かではないながら文明七（一四七五）年に三河の国、現愛知県の大樹寺で行われたと言われている。余談だが、大樹寺はかつてこの連載でも訪れた名利で、徳川家康が若かりし頃、負け戦の果てにこの大樹寺に逃げ込み、自害しかけたところを時の住職に説得された寺である。

さて、この大樹寺で始まった在家信者への五重相伝は、浄土往生を願う人々にとっては、誉号という戒名を生前に授けられる喜びとともに、浄土宗の教えの真髓を体得する貴重な法会である。が、この

樹敬寺の開基は、奈良の東大寺の勸進聖となった重源上人像。丸い土のかたまりは大仏の御頭鑄造時に感得した土玉。



五重相伝、まるで冬の気圧配置と同じように西高東低、関西を中心とした西のお寺で開かれることが多い。もちろん関東でも五重相伝が行われないわけではない。だが、その回数を比較してみると明らかに違いがあるそう。

和泉、大和、近江五重という言葉が残っていることからもうなづける。

さて、今回訪れた寺院は伊勢松阪の古刹、樹敬寺である。この樹敬寺、樹の字は在家への五重相伝発祥の寺院、大樹寺から。そして敬はそれまで不断念仏院という名の寺を復興した開山、敬譽松颯上人の敬からである。つまり、三河大樹寺の開山上人の弟子である敬譽上人が再興したお寺で、現在は第四十六世の山下法文住職がその法灯を継いでいるが、まさに「五重相伝の寺」といつてもいい、布教に専心する寺院なのである。

明治二十六年の松坂大火からの復興後の記録だが、同三十九年から始まり、同四十二年、大正三年、同十年、十二年と続き、最近では平成五年、そして同十三年までなんと十五回の五重相伝が開かれている。しかもここ数回はいつも受者が二百人を超えるというから驚く。

五重相伝を開くのは何十年ぶりなどというお寺が多い中、平均して七、八年ごとという短期間にもかかわらず、最低でも五日間を通

松坂城内に移転された本居宣長の自宅。鈴屋と呼ばれ、松坂商人の館の並びにあった。



う法会にそれだけの人が集まる。思わず住職に檀信徒の数を聞いてみた。

「今の松阪にある寺院はおよそ四百年前に松ヶ島という所から移転してきますが、移転当方で百五十から二百軒だったようで、現在は六百軒ぐらいですかね」。千、二千という数を思い浮かべていただけに、六百という数字を聞き、さらに突っ込んでみた。

「いや、もちろん檀信徒には家族がいますし、また地元の人でも是非受けさせて、とおっしゃる方もいます。それに近くの浄土宗のお寺の檀信徒さんでも、巡り合わせもあり、当山にお見えになる方もいらっしゃいますので」

単純計算で檀信徒数割る二百人とはいかないと思っただけだが、それにしても檀信徒の一家はおじいちゃんやおばあちゃん、そして息子娘、さらにお孫さんまで、五重相伝を受ける計算になる。もちろん強制ではないので、まさに阿弥陀さんとの縁結び、後生での極楽往生を願うのが当り前の土地柄がそうさせるのだろう。

さて、平成十三年の五重相伝、受者にはお寺が授けた番号が、受者全員同じ番号という番号だ。この番号は浄土宗だけではないから、何十年、何百年経っても「あつ、このご先祖は浄土宗信者だったのだな」と子孫にわかってもらえるということだそう。

その番号をなぜ、「諦」にしたのか？ この理由を探る時、古刹

松坂城壁。戦国武将蒲生氏郷が築城した松坂城は、かつての縄文・弥生文化で栄えた地でもあり、長い歴史のある地。また武家長屋も残っていて、観光名所となっている。



樹敬寺の檀信徒の中でも、特筆すべきある人物に突き当たる。国学者としてその名を知られる本居宣長である。

諱号の説明の前にしばし、松阪出身の有名な人物である本居宣長の人となりについて見てみよう。

松坂牛の老舗料亭や呉服商の老舗が並ぶメインストリートに動くその人形が飾られるなど、宣長は享保十五（一七三〇）年、この松阪で生まれた。「掛け値なし」の新商法で江戸の豪商となった三井家をはじめ、江戸で一番多い屋号の伊勢屋が示すように、この松阪は多くの商人を生んでいて、宣長も木綿商を営む商家に生まれていく。十九歳で父を亡くした宣長は養子に出され、商人修行の道に入るも、もともとの学問好き。結局、商売に熱が入らず実家に戻った。そんな宣長を母は医者にすることを決心、京都にのぼり師につかせた。その師との出会いの中で宣長は国学の道を歩むことになる。

医師となり開業、一方で国学の勉強に励む中、当時の国学の第一人者、加茂真淵が松阪を通りがかり対面する。迷わずその門に入り、以後は『古事記』研究に専心し、三十五年を費やした『古事記伝』を著し、享和元（一八〇一）年、七十二歳で没する。遺体は遺言通り、樹敬寺の月参り墓と郊外の山頂のおくつきに埋められた。

さて、このプロフィールは辞典に掲載されているもので、浄土宗寺院の檀家としての宣長にはこの他に忘れてはいけない出来事がある。



る。そう、五重相伝を受けているのである。

『宣長少年と樹敬寺』という小冊子がある。樹敬寺第四十五世山下法亮住職が昭和四十四年に発行、平成九年に現住職が復刻したものだが、これによると、宣長は十歳の時に母の勧めで樹敬寺で授戒。幼童の身にして七日間の門法で戒血脈と英笑の戒名を授かった。そして十九歳の秋、樹敬寺で五重相伝を受ける。十月十九日から始まる五重相伝は時の樹敬寺住職、第三十三世諦誉上人の十念から始まった。

さて、ここで先の諦誉号の話に戻ろう。平成十三年は宣長没後二百年にあたる。そこで住職は五重相伝を宣長が受けた十月十九日に開き、また誉号を宣長が戒を授かった諦誉上人の諦に誉号をそろえたのである。

「なんといつでも宣長の寺というのは、かけがえのない寺宝のようなものです。その宣長と縁ある年に開かれた五重相伝でしたから、その縁を忘れないために、いろいろ工夫したのです」

なお、宣長は国学の道を歩みはしたものの、生涯の念仏信者で、その原点は五重相伝を受ける年の夏に詠んだ和歌にある。南無阿弥陀仏の六文字を冠した六首の最後は「仏法の 教えはあまた 多けれど たぐひはあらじ 南無阿弥陀仏」で結ばれている。

さて、宣長が有形無形の寺宝だとすると、一番の寺宝といえるの



松坂商人の中でも別格なのが三井高利。「現金掛け値なし」で三井家の礎を作った。市の指定遺跡として門や供養塔が残っている。

は、樹敬寺の前身である不断念仏院を創建した重源和尚に、法然上人が自ら彫刻開眼し授けたといわれる法然上人像。そして重源和尚が東大寺の大仏を再興した時の土玉になるだろう。

先に述べたが樹敬寺の開山は敬養松嶺上人だが、開基は俊重房重源和尚である。重源和尚は宋にも渡った高僧で、大仏開眼後の建久六（一一九五）年に七つの念仏堂を建立、その一つが樹敬寺の前身となる松ヶ島の不断念仏院であった。開山当時は境内に湯屋をつくり、伊勢参りの街道筋の念仏道場として、その名の通りいつも念仏の声が絶えなかった。

その不断念仏院はその後、北畠氏の菩提寺となったものの、文亀元（一五〇二）年の兵火で焼亡、敬養上人の再興を待つことになる。

さらに時が降り、松ヶ島からの移転は第九世英誉上人の代で、天正十六（一五九〇）年になる。時は戦国時代、豊臣秀吉の命で松ヶ島城に入城した蒲生氏郷は、それまでの街道を山寄りに移し、松坂城開城とともにすべてを移転した。すでに織田信長の命で門中寺院の総頭となっていた樹敬寺は、移転時にも参宮街道と和歌山街道の交差する要衝におかれた。蒲生氏の軍事上の意図もあったようだが、今も境内地は当時と変わっていない。

こうした中世の歴史から江戸時代を超え、現代に目を向ける時、樹敬寺の命の恩人ともいえる人物が二人いる。一人は樹敬寺第四十



重源上人が入宋する時、別れを惜しんだ法然上人が、自ら彫刻開眼し授けたといわれる法然上人ひな形の御影。樹敬寺の第一の寺宝だ。

二世、暢譽法音上人。そしてもう一人は樹敬寺檀家、原田二郎氏である。

ともに江戸時代に生まれ、昭和六年、同五年に没した同時代の朋友で、明治二十六年の松坂大火後の樹敬寺復興の立役者である。しかし、特記すべきは兩人とも存命中から、法音上人は大音会という名で、そして原田氏は積善会という名で、募う会と福祉事業の財団法人が作られ、それが現在も活動が続けていることである。現住職は大正十四年生まれで、四、五歳の時に座った法音上人の恰幅の良いい膝の上を覚えていて、今でも本尊前の須弥壇にその御影が祀られている。また原田氏の歌碑は境内中央に聳えている。お二人の魅力とその実績に触れる余裕はないが、まさにこの二人なしでは今の樹敬寺を語ることはできない。

こうした、時々人に人を得て輝かしい歴史を持つ樹敬寺だが、現在の山下住職は違った形で活躍をされている。何より自分の寺での教化活動が第一だが、地元の各役職、浄土宗内での役職と、列挙すれば枚挙に暇がない。それこそ席を温める暇もないが、人との出会いと縁を大切にが信条だと言う。人が集い寺をつくり、つくられた寺がまた人を呼ぶ。そんな思いが強く残る名刹である。



今年で七十九歳を迎える山下住職。お元気な姿で、ご本尊に香を捧げられる。

いずれの時か夢のうちにあらざる、
いずれの人が骸骨にあらざるべし。

（『一休骸骨』一休宗純）

人生は常に、夢、幻の連続である。
そして、誰もが皆、一皮むけば骸骨にすぎないのだ。

近くて遠い「死」

ここ数年、火葬場がガラッと様相を変えています。

「えっ、これが火葬場？」。中に入るなり、否、外観をただけで思わず言葉に詰まってしまったという方も少なくないでしょう。職業柄（？）、ご縁をいただく火葬場の数がおそらく一般の方よりは多いであろう筆者も、初めて訪れる火葬場では、こここのところたいいそうした驚きを覚えています。

緑溢れる整然とした駐車場。なかには立体もありました。大きな一枚ガラスで出来た入り口（「エントランス」というべきでしょうか）、上階まで吹き抜けになっっている広くて明るいロビー、シャンデリアのような照明……。待合室だって負けてはいません。床の間はあるし、調度品は立派だし、ちょっと洒落た料理屋さんの部屋かと見まがいそうです。全館完全空調で夏も冬も快適この上なし！ 目隠しをされて連れて来られたら、「どこのホテル？」と錯覚しそうな、そんな「構え」のところが多くなっています。

昔は……。この言葉が自然に出てくるようになってしまった自分を哀しくも思いますが、ほんとうに「昔は」簡素なところばかりでした。簡素というよりコワイというべきところが多かったはず。そう、確かにコワイところでした。

亡骸^{なきがら}を茶毘にするお窯、これも変わりました。

昔だったら、簡単なカギをはずし、エイッとばかりに重々しい扉を開けると、顔を焦がさんばかりの熱気、そして赤々とした火の残る灰とお骨。それが今では、装飾の凝った扉はボタン一つで自動開閉。扉の中は……。あれっ、全然熱くなんかないし、ステンレスの小部屋（？）になってるぞ。ここで茶毘にするの？ いいえ、その奥に「本当の」お窯があるんです。手前の「小部屋」はお骨を冷ますためのスペースなんです。そして結果的には、参列者に直接炉の中を見せない——ショックを与えない——というクッション役も果たしています。

火葬場はかつて、とくに子どもにとってはコワイところでした。さびしい場所、薄暗い建物、炎の熱さと赤さ……。火葬場に対するコワイという感覚と、死に対するコワサとはダイレクトに行き来していました。未知なる死というものの言い知れぬ実態と、誰もがそれを経験せねばならぬことを、火葬場という空間が黙って見せつけてくれました。そうしたことを子どもながらも体感できたところだったはずですよ。

死が遠くなった——。こんなことがささやかれるようになったのは、もうず

いぶん前のこと。医療技術や機関、福祉施設などが著しい発展、充実を見せはじめた頃だったように記憶しています。時代の流れに伴う家族構成の変遷などといった、さまざまな社会的背景もあったでしょう。

この場合の「死が遠くなった」とは、「寿命が延びた」ということではありません。誰かの死を間近にしたり、死というものの現実相を実感できる機会が少なくなったり、ということです。亡くなる方の八〇パーセント以上が医療機関で最期の時を迎えているという実状により、死は否が応にも覆い隠され、その非日常化という錯覚が進む、そんな結果につながっています。火葬場の「キレイ化」も、実はその「結果」と関係があるのかもしれませんが。

人生の一大事——死。そのソフト化（という誤解）は、今後進むのでしょうか。常に生の影に潜む死は、遠いものとなってゆくのでしょうか。お正月早々、コワイ話で恐縮でした。

そういえば、一休さんはこんな名句も残してくださっていました。

門松は 冥土の旅の一里塚 めでたくもあり めでたくもなし

本年もよい年となりますよう。

（小村 正孝）

健康に人生を送る

十力条・長田流

8. 明るい発想・大いに笑う（NK細胞を活性化させる）

NKというのは「ナチュラルキラー」の略語で、有害な細胞を殺す機能をもつ天然の殺し屋です。昨今、医学者の講演会や草稿に「ガン細胞を殲滅させるために、体内にこの細胞を増殖・活性化させることが有効である」と、ひんばんに登場してきます。

一九九八年十一月、東京・日比谷公会堂で開かれた「日本総合医学会」で日本笑い学会の昇幹夫理事（産婦人科医）による「あなたの笑顔、なにより薬」と題した講演を聴講しました。私も「明るく前向きに発想して大いに笑おう」と何の根拠もなく呼びかけておりましたので、カルチャーショックをうけ

（財）自然農法国際研究開発センター研究員

長田英樹



ました。私とは説得力がちがいます。

これに力を得ましたので年間七、八回は開かれる中学、高校のクラス会や海上自衛隊の同期会などには必ず出席して、それを話題にするようにしています。

そこで気づいたのが、私ほど笑う人間は少ないのではないかということです。そして、もっとも大笑いするのが前出のクラス会です。数年前、中学時代のクラス会を主催して、二十数名で二泊三日の北海道旅行に出かけました。終わったあとの感想を記した書信の大半に「こんなに笑ったことがない」「腹の皮がよじれた」と書かれていました。

大いに笑っているひとは人相がよくなります。で

すから、できるだけ楽しい時間を過ごすことです。クラス会がおすすめです。最初ぎくしゃくしていても、ものの三〇分もたたないうちに、一気に中学生、高校生の世界に精神状態が逆流します。

そして、肝心なことは「前向きに明るく発想する習慣」を身につけることです。私のばあいは「悩み三分」をモットーにしています。悩んでもどうにもならないからです。なるようにしかありません。いわゆる開き直りです。結果が悪かったらそれを試練と受け止めます。悩みの元凶、その大半が取り越し苦労、過ぎ越し苦労ですので、仏教的に言いますと「み仏のみこころのまにまに」と、神仏にわが身をお任せすればいいのです。

9. 右脳主、左脳従の生活習慣（痴呆症の職業別発症状況にもとづく）

昭和の終わり頃、私も参加している「全国経営者団体連合会」（全経連）の月例講演会に製薬会社「龍角散」の藤井康夫社長（故人）が登場しました。そのテープを入手して、長距離運転のたびに数十回

聞きました。そのなかに右脳と左脳が出てきます。

右脳（情緒回路）を多く使う趣味や職業、すなわち向上心を持ちつづけている芸術家、日々、人さまの幸せのために生きている宗教者などに痴呆が少ない。一方、常に規則にしばられている警察官や教職者、数字の計算ばかりしている税務官や銀行員など、左脳（計算回路）を多く使う職業にあるひとが、退職すると転げるようにその世界へ入ってしまうということでした。ただし、芸術的な趣味を持つてゐるひとはそのかぎりにあらずとして、右脳を働かせるような趣味をもつことを奨励し、さらに、囲碁を趣味にするひとは脳溢血にもなりにくいと結んでいました。囲碁を最大の趣味とする私は快哉を叫ぶ思いでした。

人さまの幸せのために生きることが、結果として自分の幸せにつながることを確認できた思いで、ほのぼのとした気持ちになりました。人体に有害な化学肥料や農薬を使わず、人さまの健康づくりに奉仕している自然農法実施者は文字どおりその実践者なのです。

民話
をたずねて

連載

三郎の初夢

石崎敬子



ISHI
KAWA

昔、あるところに太郎、次郎、三郎の三人兄弟があったと。

ある年の正月二日のこと、三人は、初夢を見たらみんな話せと父親に言われたと。あくる朝、太郎と次郎は初夢の話をしたが、三郎だけはどうしても話さぬ。父親は怒って勘当したと。

三郎は家を出て諸国を歩いておるうちに、悪い仲間と博打をし、殿様に捕まり牢獄へ入れられたと。殿様にはそれは美しい姫様があったが、この姫様が毎日牢屋へ飯を運んでくれたと。

殿様の国の隣には鬼の国があり、鬼の王が殿様に、姫様を欲しいと幾度も言つてよこしておったが、いつも断られておったと。そのうち鬼の国から難題をよこして、解ければ姫を貰うと言つてきたと。

まず初めに、長さ一尺五寸ばかりの朱塗りの棒をよこし、この棒の元と先を見分けよと言つてきたと。端から端まで同じ太さで、いくら眺めても元と先が分からぬ。いよいよ鬼の国へ行かねばならぬのかと姫様は泣いておったが、いつものように牢獄へ飯を運んだと。

「姫様、なぜそんなに悲しい顔をしていらっしゃるのですか」

三郎に聞かれて姫様は、実はこれこれ、と訳を話したと。

「そんなことなら心配はいりません。その朱塗りの棒を物差して測り、真ん中を糸で吊して、重くて下がる方が元で、軽くて上がる方が先です」

三郎に教わった通りしてみると、なるほど元と先がわかったと。殿様は棒に印を付けて、鬼の国へ返してやったと。

すると今度は、馬を三頭よこして、どの馬が一番年をとっておるか、二番目がどれか、三番目がどれか、見分けろと言ってきたと。三頭とも大きさも毛の色もまったく同じで、一向に見分けがつかん。また姫様が悲しい顔をしておると三郎が、

「そんなことなら心配はいりません。一昨年穫った麦と去年穫った麦と今年穫った麦をその馬達に食べさせなさい。一昨年の麦を食う馬が一番年寄りで、去年の麦を食う馬がその次で、今年の麦を食うのが一番若い馬です」と教えた。その通りしてみると、なるほど麦を食う順で、馬の年の順がわかったと。殿様はまた印を付けて、三頭の馬を鬼の国へ戻してやったと。

しばらくすると、今度は鬼の国から鉄の弓矢が射られてきたと。

その矢は、殿様の屋敷の庭へドーンと地響きを立てて突き刺さったと。見るとその矢には短冊がついており、

「これを抜いて担いで来い。さもないと姫を奪いに行く」と書いてあったと。

その矢は目方が十七貫もあって、地中深く刺さっておる。力自慢の家来達が抜いてみたが、びくともせん。今度こそ、鬼の国へ行かねばならぬと、姫様はしくしく泣いておったと。

しかし、今回も三郎は、

「そんなことなら心配はいりません。私が抜いてみせましょう」と、事もなげに言つてのけたと。

殿様は、三郎を牢屋から出して抜かせてみることにしたと。三郎はたいそう力持ちで、庭に刺さった鉄の矢を楽々と抜き、担ぎ上げて歩いたと。殿様は感心して三郎の罪を許し、その矢を鬼の国へ担いで行かせることにしたと。そこで三郎は殿様に願ひ出て、自分と同じ年頃の、同じ身体つきの、同じ顔つきの若い衆を四人支度してもらい、五人で出かけることにしたと。

民話

をたずねて



鬼の国へ着いた三郎は、

「さあ、注文のものを持って来ました」

と、矢を鬼の王の庭に、えいっと深く刺したと。

それを見た鬼の王は驚いたが、

「よしよし、よく持って来た。まあ、今日はもう遅いから泊まれ」

と、五人を屋敷の中に通し、夕食をご馳走したと。

「三つの難題を解いたからには、隣の国にはよほどの利口者がおるとみえる。五人の中におるに違いないが、そいつは生かしておけん」

鬼の王はそう思い、夜中に五人の寝ているところへ行ってみたと。

見ると五人とも同じようで、どれが三郎だかさっぱりわからぬ。

そこで鬼の王は、寝ている五人を試すために聞いてみた。

「魔王の酒は何の酒」

寝たふりをしておった三郎は、すぐに

「人の生き血を絞る酒」と答えた。そこで、鬼の王は寝ている三郎の髪の毛を、少しだけ切って取り帰って行けた。三郎は起き上がり、他の四人の髪の毛も、自分と同じよう切っておいた。

翌朝、鬼の王が五人を見ると、みな同じように髪の毛が切つてあるので、どれが三郎だか見分けがつかん。

「えーい、五人とも釜ゆでにしてしまえ」

鬼の王は腹を立て、家来の鬼どもに言いつけたと。鬼どもが五人を煮立った大釜の中に変き落とそうとした時、三郎は、

「こんな熱い湯に人間が入れるものか」と、大釜を担ぎ上げ鬼どもに投げつけたと。そして、こんな所にもう用はないと、さきさきと五人で逃げ出したと。

鬼の王はあんな強い男にはかなわぬと諦めたのか、追っ手もよこさず、五人は殿様の所に無事戻ることができた。殿様はたいそう喜び、三郎を姫様の婿にしたと。

そこで、三郎は実家に帰り、自分が家から出てからの一部始終を話したと。

「父さん、これが俺の初夢だ」

謹 賀 新 年

平成十五年

浄土門主
総本山知恩院門跡第八十六世

中村 康隆

大本山増上寺
法主

成田 有恒

大本山金戒光明寺
法主

坪井 俊映

大本山百萬遍知恩寺
法主

大野 忍敬

大本山清浄華院
法主

大田 秀三

大本山善導寺
法主

阿川 文正

大本山光明寺
法主

宮林 昭彦

大本山善光寺大本願
法主

鷹司 誓玉

謹 賀 新 年

平成十五年

浄土宗事務総長

水谷 幸正

大本山増上寺執事長

江口 定信

〒105・0011 港区芝公園四・七・三五

浄土宗東京事務所長

袖山 榮眞

〒380・0865 長野市西後町一五六八 十念寺

〒154・0017 世田谷区世田谷四・七・九

大吉 寺

住職 成田昌憲

平成大事業勸募懇請中(三月中)
御影堂屋根替大修理完成
阿弥陀堂新築中

美作 誕生 寺

〒709・0022 岡山県久米郡南町里方八〇八
TEL 〇八六七 (二八)二一〇二
FAX 〇八六七 (二八)二一六二

清水湊 貝付毘沙門天

忠高山 實相 寺

〒420・0039 静岡市鷹匠二丁目二十四番十八号

玉桂山 華陽 院

電話 〇五四 (二五)二 三六七三
FAX 〇五四 (二五)二 三六五六

謹賀新年

平成十五年

學大乘淑徳学園理事長
淑徳大学学長

長谷川匡俊

〒174-8645 東京都板橋区前野町五・五・二

学校法人 淑徳学園

理事長 佐藤良純

淑徳学園中学校・高等学校

校長

大谷壽雄

総本山知恩院
おてつき運動 推進部長

東海林 良雲

塩釜市雲上寺

浄土宗大願寺住職
浄土宗議会議員

神谷英敏

正覚寺

住職

江藤英賢

〒915-0813 武生市京町二・一・八
TEL〇七七八(二二)一三一九
FAX〇七七八(二二)六一一七

和歌山・西念寺

武田 脩彦

〒642-0024 海南市阪井四六六

宗議会議員

河本真龍

〒758-0064 萩市橋屋町四二一
電話 〇八三八(二二)一五八七

謹賀新年

平成十五年

宗議会
議長

熊谷靖彦

佐賀教区本應寺

（浄土宗平和推進協議会の
国際貢献を期待する）
宗議会議員

小田義海

九品院住職
佐世保市大和町一八八、一

弘経寺住職

金田進徳

〒302・0023 茨城県取手市白山二、九、二八

大蓮寺

〒371・0022 前橋市千代田町三、三、二四

孤峰山 蓮馨寺
宝池院

吞龍上人奉祀・祈願所

糸原恒久

〒350・0066 川越市連雀町七、一
電話〇四九（二二二）〇〇四三
FAX〇四九（二二六〇）〇六七六

赤坂六地藏尊

浄土寺

〒107・0052 東京都港区赤坂四、三、五
電話〇三（三五八三）三六三〇

明福寺

福井豊信

〒132・0013 江戸川区江戸川三、八、一

謹 賀 新 年

平成十五年

伊勢教区

山下 法文

松阪市樹敬寺

愚鈍院 住職
こつぶがや文庫主

中村 眞道

〒984・0051 仙台市若林区新寺三・一二・一七
電話〇二二(二五〇)六〇五七

宗源寺

齋藤 价洲

〒110・0015 台東区東上野五・一・六

函館 称名寺

〒040・0055 函館市船見町一八・一四
電話〇一三八(二二三)〇五七四

勝願寺

〒365・0038 埼玉県鴻巣市本町八・二・三一
電話〇四八(五四二)〇二二七

骨仏の寺

一心寺

〒543・0002 大阪市天王寺区逢阪二・八・六九
電話〇六(六七七二)〇四四四

晴雲寺住職

塚田 弘導

〒254・0046 平塚市立野町六・五
電話〇四六三(二二二)二六三八

謹 賀 新 年

平成十五年

貞松院住職

山田和雄

〒392-0004 諏訪市諏訪一、一六、二一
電話〇二六六(五二)一九七〇

願行寺住職

佐藤成順

〒140-0004 品川区南品川一、一、一一

梅窓院

住職

中島真成

東京都港区青山
2-26-38
電話 03 (3404) 8447
ホームページ
<http://www.baisouin.or.jp>

鎌倉大仏殿

高德院

〒248-0006 鎌倉市長谷四、二、一八
電話 〇四六七(一一)〇七〇三
FAX 〇四六七(一一)五〇五一

天光院

真野龍海

<http://www.evamne.jp/tenkoin>
ryumano@venus.dtlne.jp

光円寺住職

佐藤良純

〒112-0002 文京区小石川四、二、一八

横浜

大光院

〒232-0002
横浜市南区三春台139
電話045(241)7676
www.daikoin.com

浄土宗東京教区教区長
光取寺

大室了皓

〒141-0001 品川区上大崎一、五、一〇
電話〇三(三四四一)八三八四



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●新聞

新聞で作る紙入れ風邪の夜

永野 司郎

〔特選〕

風邪にこもって、所在なさに新聞紙で折り紙をする。鶴や舟でなく財布である。折ったところで使えるものでもなく、使えたところで今そういう状態にない。早く外とのつながりを得たい気持ちだが、そうさせたのだろうか。

〔佳作〕

新聞の折り目正しき冬の朝

富田 筆子

セーターの裏に一枚新聞紙

大野 肇

新聞を逆さに読む兎冬ぬくし

井村 善也

●台

〔特選〕

菊活けて花台の映ゆる老舗かな

谷 しげ子

花台は前から床にあったものかどうか。菊を活けた花瓶を置いて、一層よく映えたというのである。菊より花台を褒めたのが、その

立派さとともに、いかにもしにせにふさわしい風格を床に与えている。

〈佳作〉

灯台の光に時雨華やげり

桐部 千秋

鏡台の桑の木目に冬の蠅

金谷 友江

嫁入りの卓袱台丸し冬の百舌

清水 みね

●自由題

〈特選〉

大寺の雨や鳩吹く女たち

片桐てい女

参詣に来て雨宿りをしているのだろうか。
境内の鳩に指を組んで鳴らし、その声をまね
ているのである。もともとは山鳩を捕らえる
ためのもので、この句では季語としては弱く
なるが、こだわることはなからう。

〈佳作〉

杖に物言いて坂ゆく十夜婆

島谷ときを

傘一本用意に持ちてもみじ狩り

中村 真一

諸ふかす鋏の切り口ととのえて

野村多加子



参加作品
編集部選

古き伝統技 三代にわたる信頼

浄土宗法衣専門

古島法衣店

有限会社

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)38421289
振替0018012145231

新聞

新聞の俳壇先に目をとめて
拉致の記事載る新聞に惹かむ
新聞にくるみてキャベツ賜りぬ

今井 恵子
桐部 千秋
佐藤 雅子

闇を行く新聞少年冬帽子
愛子さま、成長知る春新聞
台

冬麗や歎声しきり滑り台
緑台の温もり残し望の夜

台座なき墓石寄り合い秋日濃し
冬晴や台いっぱいの素焼皿
自由題

尊体の欠けし地蔵に初しぐれ
時雨るるや逝きたる兄の忌を修す
知恩院の尺余の柱菊香る
散る銀杏十まで数え飽きにけり
動きよきかすりのもんべ諸を握る
咳ひとつ拳にまろめ風邪の床
手話上手少女に赤き冬帽子

浄土誌上句会の
お知らせ

題

●季語ではありません

公園

筒

自由題

締切・2003年一月二十日

発表・『浄土』二〇〇三年四月号

選者・増田河郎子(『南風』主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒10510011 東京都港区芝公園4-1-7 4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

河合富美枝
細田 初枝

中島富士子
大場 清

井村 善也
清水 みね

山本美代子
中島富士子

周東 澄江
増田 信子

浦田 ちあ

坂倉左武朗
浜口 佳春

漫画で楽しい仏教用語

漫画・藤井ひろし

邪魔

今月は「じゃま」です。何だいつでも使っているよ、と思われるでしょうが、仏教辞典で調べると「正理に背く偽りの見解をもつて、悟りの正道をさまたげる悪魔」となります。もちろん、さまたげ、故障とも。

さて、お釈迦さまは悟りを開く時に随時多くの悪魔に邪魔をされ、悟りに達するまでは簡単な道ではなかったようです。しかし、これはいつと同じ、障害を乗り越えてこそ、道が開けるのでしょうか。目の前に壁がそびえている時こそチャンスなのかも知れませんね。がんばれ日本(!!)



編集後記

南天実雪を借景に胸を張る 岱潤

昔雪たるまを作ると、決まって目玉の代わりに南天の実を使った。真つ赤な南天の実、雪によくあった。

お赤飯のお重には、必ず南天の葉っぱが入っていた。これはいつお重に詰めたかを知る目安になった。また毒消しとも言われ、庭を造るときは、決まってトイレの前には南天を植えた。

またその名から、難を転ずるとしてお正月の生け花には欠かせないものとなった。

赤々とたおやかに下がった南天の実を見ていると、妙に明るい気持ちになれるのは不思議な気がする。

そういえばこの間聞いた話で、赤は

女性、青は男性と思ってしまうのだが、時代や処によってはそうではないという。情熱、力強さを表す赤は男性を象徴し、静かな控えめな姿を表す青は女性を象徴するという解釈を聞いた。

この象徴というのは誠に恐ろしいもので、当の昔から決まっているような、そんな錯覚に陥ってしまうが、実はそうではないことが意外と多いことに気づかされる。鳩は平和のシンボルで、オオカミは悪の象徴のようなこともその一つだ。思いこみや決めつけで物事を見ないように、今年も心がけたい。

(長)

次号二・三月合併号は三月初旬の発行です。

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

村田洋一

佐山哲郎

編集顧問

大室了皓

浄土

六十九巻一月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十四年十二月二十日
発行 平成十五年一月一日

発行人 真野龍海

編集人 佐藤良純

印刷所 シーティーイー株式会社

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三・三五七八 六九四七
FAX 〇三・三五七八 七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

New & Used Cars
Takata & Co., Ltd.
SINCE 1965

あなたの一台を世界から

ベンツ・ポルシェ・

フェラーリ・ロールスロイス・

国内の各ディーラーにも

在庫の無い車種でも

世界中から輸入しお届け致します。



最新在庫情報をご覧になれます。

<http://www.takataco.jp>
E-mail: union@takataco.jp

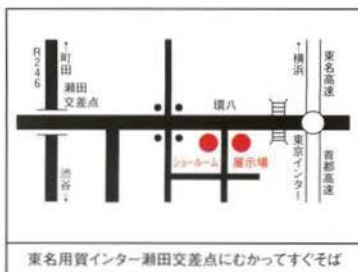
UNION

輸入元(外国自動車輸入協同組合員)
株式会社 高田商会

東京都世田谷区玉川台2-12-1 (〒158-0096)

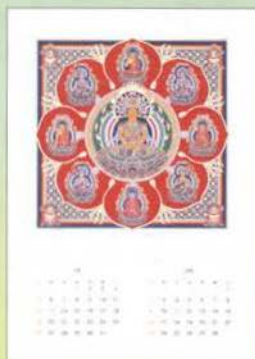
営業時間：平日／9:30～20:00 日祝／10:00～18:00
定休日／年中無休

☎03-3708-1911 FAX.03-3708-2066



東名用賀インター瀬田交差点にむかってすぐそば

2003年 オリジナルカレンダー



1・2月



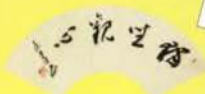
表紙



3・4月



5・6月



5・6月



1・2月

染川英輔画伯 特製仏画オリジナルカレンダー

縦72.8cm×横51.5cm (B2サイズ)
専用箱付き6枚綴り
定価 2,500円 (商品番号002-0N2)

大正大学教授 赤平泰処オリジナルカレンダー

縦72.8cm×横51.5cm (B2サイズ)
専用箱付き6枚綴り
定価 2,500円 (商品番号001-0N1)

ティー・マップでは上記のオリジナルカレンダーを通信販売いたします。

お問い合わせは
フリーダイヤル **0120-721-310** 受付時間: 平日午前10時～午後4時まで
FAX: 03-5472-5766 (受付時間: 24時間受付)

ティー・マップは、大正大学の知的資産を活用して 皆さんのライフプランを応援する会社です。



2003年1月よりセミナー開催

ティー・マップ浜松町では、御寺院向けセミナーをはじめ一般の方々のための
仏教に関する公開講座を開設しますので御期待下さい。

株式会社ティー・マップ浜松町

〒104-0013 東京都港区浜松町1-26-4 みとらビル2-3階
TEL: 0120-721-310 FAX: 03-5472-5766

- JR「浜松町駅」・モノレール「浜松町駅」より徒歩3分
- 都営浅草線・大江戸線「大門駅」A2出口より徒歩2分

T-mapp
大正大学事業法人(株)ティー・マップ